

題目：ポジティブな情動処理に対する笑顔プライミング効果-事象関連脳電位を用いた検討

氏名：松野あかね

指導教員：村田明日香

本研究においては、ポジティブな情動処理場面において他者の笑顔表情がどのような影響を及ぼしうるかを、主観的な指標の他に客観的な指標も同時に用いて探索的な検討を行った。他者の表情認知に関わる先行研究は、他者の特定の情動の表出を知覚することによって自分自身も無意識のうちに同じ感情を経験する情動伝染の現象に関わるものも含め数多く存在しているが、他者からの影響を受けた何らかの情動喚起シーンにおける主観的な変化と客観的指標による変化が必ずしも一致するとは言えない。本研究では、笑顔または真顔のプライミング刺激を先行して与え、その後情動喚起刺激を呈示し、本刺激に対する主観的な評価と刺激呈示時の客観的指標の測定を行った。主観的な評価では、参加者はランダムに選ばれた試行においてのみ情動喚起刺激について7段階で印象評定を行った。その際顔の写真ではなく直前の写真についての評価をするよう教示した。客観的指標には、生理的指標のひとつである事象関連電位(ERP)を用いた脳活動の測定を採用した。実験の結果、主観的評価においては真顔プライミング呈示時と比較して笑顔プライミング呈示時の評定値が有意に高くなり、笑顔刺激によってポジティブな情動が喚起されたことでその後の刺激への評価にポジティブにバイアスがかかった。これは先行研究を指示する結果であると言える。一方ERPの測定においては、プライミングの条件による差・情動喚起刺激の種類による差はいずれも見られず、情動的なイベント発生時にはニュートラルなイベント発生時と比較して脳活動をはじめとする多くの生理的指標においてより大きな変化が生じるという先行研究の知見や、主観的評価の結果との違いが見られた。加えて笑顔-中立刺激条件で惹起された陰性の波形に注目して行った検定では、同じ中立な刺激呈示時において、先行するプライミング刺激が笑顔である場合よりも真顔である場合の方が脳の反応が有意に大きくなるという結果が得られた。この波形は、期待していた結果と実際の結果とのギャップを反映して生起するフィードバック関連陰性電位(feedback-related negativity: FRN)と見られ、先行する笑顔の呈示がその後の刺激に対する期待を高める効果をもつと考えられる。これはあくまで示唆的な知見であるが、笑顔の効果については今後さらなる検討がなされることが期待される。